

「ちよつとだけ」

吉田 千枝

柳田先生こんにちは。今年の夏もとても暑かったですね。いかがお過ごしでしたでしょうか。

私は3才の息子“有杜^{ゆうと}”を連れ、図書館で過ごした日が何度ありました。なぜなら荒川区ではこの夏、「あらかわ街なか避暑地」というものを実施していたからです。これは、各家庭での電力消費を控え、図書館などの公共施設を避暑地として利用することで、節電対策と熱中症予防につながようというものです。それを知った私たちは、親子は、夏休みの間度々図書館へ足を運ぶことにしました。

今日はそこで出会った数々の絵本の中からくに印象深かった一冊を紹介したいと思います。

「ちよつとだけ」という絵本です。ママは赤ちゃんがうまれて忙しいので、なっちゃんがいろんなことを自分でチャレンジしてみる姿が書かれた絵本です。牛乳が飲みたいから自分で入れてみます。すると、こぼしちゃったのだけど「ちよつとだけ」コップに入れることができました。公園に一人で行きます。ブランコはママが背中を押してくれるみたいには動かせなかったけれど「ちよつとだけ」動かすことができました。どれも完璧ではないけれど、「ちよつとだけ」成功して満足そうな顔をしているなっちゃん。

そしてこの時、有杜が「うわぁすごいね」と言ったのです。私はハッとしました。子供にとって自分でできた時の喜びは、とてつもなく大きいもの。それがたとえ完璧ではなく、「ちよつとだけ」だったとしても…。

私だったら有杜が自分で牛乳を入れようとすれば「こ

ぼさないようにね！」とヒヤヒヤしながら監視し、こぼれた時には「だから言ったでしょ！」と怒っていたかもしれませぬ。「ちよつとだけ」コップに入れられた牛乳には目にも止まらずに。

「ちよつとだけ」成功していて本当は有杜は喜びたいはずなのに、私は怒ってしまっていた事はなかっただろうか。この絵本を通じてそう思い返してみると反省させられる気持ちになりました。子供なのだから失敗は当たり前。それよりも「ちよつとだけ」の成功を見落さずに、しっかりほめてあげないといけないな。そして一緒に大喜びをしよう、と私は決めたのです。

それからもう一つこの絵本で感じたことがありました。なっちゃんはママに「ちよつとだけ」だっこして、と言っています。忙しいママに対して遠慮しているのです。本当は牛乳も入れてもらいたかったし、パジャマのボタ

ンもママにとめてもらいたかったなっちゃん。しかし遠慮をして自分でやってみたのです。

私は子供の遠慮について考えさせられました。母親の忙しい姿を子供に見せてしまうことは、子供の遠慮を大きくさせるのではないかと感じました。それは、言いたいことがあるのに言えない環境を作ってしまうこと。

誰にでも少しは心あたりがあるのではないのでしょうか。実際私も有杜にそうさせてしまっていた様です。というのは、家だと忙しくしている私だけど、こうして二人で図書館へ来てのんびり有杜と同じ事をしている時間を、有杜はとても嬉しそうで甘ったれた表情で過ごしているのです。本当はこういう時間が待ち遠しかったのです。う。

私はこの夏「あらかわ街なか避暑地」を知り、数々の絵本と出会ってたくさんのかことを学んだり気付けられた

りました。絵本とは時に“子育て参考書”となるものですね。そして親子にとっては絆を深めるものにもなるようです。

私は絵本を閉じ、なっちゃんのママがなっちゃんに言ったように「ちょっとだけじゃなくていっぱいだったんじゃないんですか？」と聞いてみました。有杜はなっちゃんと同じく最高の笑顔で「いいですよ」と答えてくれたのは言うまでもありません。

【柳田邦男さんからのメッセージ】

親はややもすると、自分が子どもを育てているという上からの目線で、子どもを管理するように見てしまいがちです。しかし、子育ての大切なポイントを、親は知りつくしているわけではないですね。親が次々に直面する問題の大半は、はじめに経験することですし、その都度解決していかなければ

ならないものばかりです。よく言われるように、親は子どもから学ぶことによって、自分も成長するものです。つまり、子育てとは、親と子が一緒に成長する、人生の貴重な時間なのです。

吉田さんは、そのことに三歳の有杜くんゆうとを育てる中で気づいたと言えるでしょう。絵本『ちよっとだけ』は、三歳くらいになっちゃんが主人公。赤ちゃんが生まれて、お姉ちゃんになったなっちゃんは、歩くときお母さんに手をつないでもられないし、牛乳をコップに注ぐのも、ブランコをこぐのも、パジャマを着るのも、自分でやらなければならない。お母さんは赤ちゃんのめんどろをみるので、いつも手がふさがっているからだ。なっちゃんは失敗しながらも、何とか自分でこなししていくのだが、フラストレーションがたまる。

いっぱい遊んでおねむになったとき、お母さんに、「ちよっとだけ、だっこして」と言う。そのときお母さんは、すば

らしい対応をする。「ちょっとだけじゃなくて、いっぱいだっこといいですか」と。なっちゃんは満面に笑みを浮かべて、「いいですよー」と答える。今度は赤ちゃんにちょっとだけがまんしてもらい、なっちゃんはお母さんにだっこされて、スヤスヤと眠る。

赤ちゃんができた時、上の子に疎外感を持たせないようにする大切なポイントをめぐりに描いた傑作絵本と言えるでしょう。

吉田さんのお子さんは有杜くんだけですが、この絵本の読み聞かせをする中で、いくつかのすばらしい気づきをしたことが書かれています。

一つは、なっちゃんが少しだけフランクをこべうことができたり、牛乳をこぼしながらもちっとだけコップにつぐことができたりの場面でのことです。有杜くんが「うわあすごいね」と言ったことから、吉田さんは親の目と子どもの目の

根本的な違いに気づいたことです。親は子どもの失敗やできないことのほうに注目して、叱ってしまいがちです。しかし、有杜くんは、なっちゃんがちょっとだけでも自分の力でできたことのほうに感動しているのです。子どもにとっては、何事につけはじめてやることは、大変なチャレンジです。たとえちょっとだけでも、「自分でできた時の喜びは、とてつもなく大きいもの」ですし、お母さんにほめられたいものです。吉田さんは、その気づきから、「一緒に大喜びをしよう」と決心したということです。私は拍手を贈りたい。

もう一つは、何事につけ、子どもに遠慮させてしまう空気をつくっていたことへの気づきです。子どもはいくつになっても、きょうだい何人いても、時には自分を個として見つめ、愛してほしいという感情を持っているのです。短い時間であっても、全身で向き合ってほしいのです。ただただ「お母さんは忙しいのよ」という雰囲気でしたのでは、子どもは

のびやかな感情表現をしなくなり、自分の欲求も感情も抑圧してしまいうことが身についてしまいます。そうになると、その子の人格にゆがみが生じかねません。吉田さんが、夏の間、有杜さんと図書館に何度も出かけて読み聞かせをしたことは、なっちゃんのお母さんが「ちょっとだけじゃなくて、いっぱいだっこしていいですか」と言ったことと同じ意味をもつと言えます。

親はやはり子どもから大切なことを教えてもらうのです。絵本の読み聞かせは、親にとっての学びの時間でもあるのです。そのことを、できるだけ多くの子育て中の親たちに知ってほしいくて、長文の選評を書かせて頂きました。